



## 8月6日に見た違う“風景”

今年も8月6日を迎えた。被爆から75年、被爆者の高齢化がすすみ、被爆者<sup>生存者</sup>の数は年々減少をたどる。生きている間に被爆体験を伝えなければと思われる方も少なくなく、新聞等に綴られたその体験談等に込められた平和への願いに心打たれる▼一方、これに関連して75年を機に、この11月にソウルで開催が予定されていた反戦平和フェスティバルが、コロナの影響で延期となったことが残念でならない▼昨年11月13日の本欄で取り上げたが、原爆が投下された広島には当時、約7万人の韓国人が住んでおり、約半分3万5千人が亡くなったと推定されている。日本の敗戦にともない大韓民国が独立して約3万人が韓国に戻ったとされるが、その中にたくさんの原爆重症患者が混じっていた。しかしながら故国に帰った人たちは「親日派」とみなされて差別を受け、また韓国には被爆者保護法もなく、十分な治療や保護を受けられずにきた。そうした中で、被爆者の霊を慰めるために原爆平和展示館を設立し、独居老人介護支援に取り組み、反戦平和を訴え続けている日本人僧侶の高橋公純さんがいる▼この高橋さんが主宰して日韓の交流をあわせての反戦平和フェスティバルを計画していた。ここにこれも昨年10月10日の本欄で紹介した沖縄で活躍するシンガーソングライターで、思想家、歴史家であり、絶対平和主義と環境保護を訴え続けている海勢頭豊さんに参加してもらい、海勢頭さんの歌と共に、高橋さんとの対談を実現させることを目論んでいた▼高橋さんとお会いすることによって、8月6日をいつもとはまた違った感慨を持って過ごした。コロナに負けず、遠からず是が非でも海勢頭さんも参加したソウルでの反戦平和フェスティバルの実現を後押ししていきたい。(土着菌)